

プロメテウスの

中野孝次

nakano kouji

盗んだ火

プロメテウスの盗んだ火

中野孝次

紹介

一九二五年、千葉県に生まれる。
東京大学文学部独文科卒。カフ
カ、ノサックなど現代ドイツ文学
の翻訳紹介、日本文学の批評をは
じめ小説、エッセイの著作と多彩
な活動をつづけている。主な著書
に『ブリュッゲルへの旅』（日本
エッセイスト・クラブ賞受賞）、
『実朝考』、『麦熟るる日に』（平
林たい子賞受賞）、『自分らしく
生きる』、『はみだした明日』、
『生のなかば』、『ハラスのいた
日々』などがある。

プロメテウスの盗んだ火

一九九二年四月二三日 第一刷発行

著者——中野孝次

発行者——安田富男

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10 〒104-0311

電話 書籍販売部 〇三三三五四五七一三〇

書籍編集部 〇三三三五四五七〇三〇

印刷所——三松堂印刷

製本所——積信堂

装幀——コガワ・ミチヒロ

© 1992 Kouji Nakano Printed in Japan

ISBN4-8387-0307-4 C0095

乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えます。

定価はカバーと帯に表示してあります。

プロメテウスの盗んだ火◎目次

(青春と芸術)

青春の書『トオ・クレエゲル』⑨この氣迫學ぶべし⑭

救いとしてのモーツアルト②⑥本に救われた話②⑨

(マニアの世界)

食は文化なり③③古書の世界の測り知れぬ奥の深さ③⑥

夥しい数の犬の本④①絵画売買にまつわる生臭い話④⑥

(自然とともに)

『人間らしさ』求める集団⑤③人生回顧に宗教的深み⑤⑤

死者を祀ることの根源にあるもの⑤⑦新しい漁業の方法を求めて⑥①

街の中でも鳥たちは生きていくが⑥⑥日本人の水文化の高さ⑦①

(核について)

死の灰の恐怖⑦⑨破滅に瀕した地球の呻きに耳を傾けよう⑧①

カートヴオネガットの味わい⑧⑦鶏は啼いとるもんね、また⑨②

(アジアを考える)

日本人のアジア観を検証する⑨⑨インドを考える本⑩④

インドの奥深さを考える⑩⑦東南アジア文化と日本人の乖離⑪②

（変革する中国）

文革への痛ましい反省^{⑪⑨} 手厳しい批判と人間愛^{⑫①}

中国知識人の苦悩描く^{⑫②}

（韓国のきのう今日）

朝鮮民族の魂を追及―三十年前の悲劇を見つめて^{⑫⑦} 韓国と日本の関係を考える視点^{⑬③}

（南アメリカの真実）

生気溢れる革命ルポ^{⑬⑨} 「人間の品格のために」戦う南米の人々^{⑭①}

（戦争と傷痕）

軍人に真向から画家の自由を主張^{⑭⑨} 凍と張った精神の働き^{⑮①}

満州引き揚げの地獄絵^{⑮④} 奥行のある歴史空間^{⑮⑥}

『昭和の遺書』を読む^{⑮⑧} 極限状況を目撃した少年 『砲撃のあとで』解説^{⑮⑩}

（歴史を見る目）

明治の人びと^{⑮⑦} 江戸ものを読む^{⑮⑧}

日本の底層から地球全体に及ぶまなざし^{⑮⑮} 「忠臣蔵」論の変相^{⑮⑯}

親鸞と出会った人々^{⑮⑰} 歴史の悲劇^{⑮⑱}

（評伝を読む）

自伝の楽しみ ②⑧ 歴史を生き抜いた一商人 ②⑩

リアルに中世社会描く ②⑪ 『権力と笑のはざ間で』 ②⑬

巨人の肖像 ②⑬

（老いそして死）

頑固な存在感をもった老年の生の感懐 ②② 老いがよぶ青春の記憶 ②④

全編貫く純一な喪失感 ②④ 私の好きな短編 ②⑤

母親のボケを克明に ②⑤ 悲惨を莊嚴する ②⑥

日々碎かれる死刑囚の魂 『宣告』解説 ②⑥ 生きる限り若さを失わぬ心意気 ②④

（文士の志）

根源からの小林秀雄論 ②⑤ 鮮かに甦る遠い時代の青春 ②⑤

大岡さんの科白そのもの ②⑥ 北御門訳トルストイを読む喜び ②⑦

名人の所作 ②⑦ リスールの消滅 ②⑧

あとがき

プロメテウスの盗んだ火

(青春と芸術)

青春の書『トニオ・クレエゲル』

本当はわたしはこの名を挙げたくはない。何かひどく恥かしいものがこの名と結びついていいるから。これではなくて、その後今にいたるまでわが愛読書となったところの別の小説——たとえば『ハルムの僧院』を取上げるのだったら、どんなにか気が楽かしないのだ。その名を挙げたところで決して嘘をついたことにはならない。『ハルム』も「青春」と呼ばれる時期にとりつかれた小説であることに間違いはないのだから……。

だが、やはりそれではちよっぴり嘘になる。「青春」と呼ぶ時期をまだ自分というものが本当にわからないでいる頃、まさに『青春彷徨』の頃とするならば、その時期にわたしが一番とりつかれていたのはこの小説『トニオ・クレエゲル』なのである。そして初期のマン短篇集なのである。全く、何という惑わしにとりつかれたことか。

マンに心を奪われた男がいて、そいつは、郁文堂に八冊だかのマン著作集が売りに出た時（一九四七年だ）、それまで持っていた本全部に机・本

棚・ふとんまで売払ってそれを買ひ、自分は以後しばらく八冊の著作集を抱いて新聞紙にくるまって寝るといふ打ちこみようだった。

わたしはその男からマン短篇集二冊を買ひ、それまでは実吉捷郎訳の岩波文庫でしか知らなかったマンを原文で読始め（独文科の学生だったから）、一時はその何篇かの書出しを暗記するくらいマンに夢中になった。

これほどすばらしい文章がほかにあるかとまでその頃は思っていた。そして中でも最も熱烈に読んだのが『トニオ』だったのだ。わたしはこの小説の中に閉じこめられ、そこからしか世界を見ることが出来なかった。恥かしいものがこれに結びついているというのはそのせいである。何しろわたしはトニオに自分を同化させてしまっていたのだから、その「認識と創造の苦悩の呪い」にとりつかれた主人公に、自分を。

滑稽なことだ。が、そうさせずにおかぬ魅力が『トニオ』にはあった。

マンの初期短篇の文章の特徴は、効果を考えぬいて劇的なまでに単純化された状況設定（広間で踊るインゲとハンスを外の暗闇の中から見つめるトニオというような）と、レトリカルによく構成された言葉の歯切れのよさである。たとえば、

今そう、かれらはそこにいた、あの二人、きょう陽の光の中でトニオ・クレエゲルのそばを通り過ぎていった者たちは。彼はかれらをふたたび見た、そして喜びに慄えた……

これを下からずるずる訳していったのではマンの文章の魅力は失われてしまうのである。繰返し反復しつつ主題を次第に鮮明にしていく音楽的手法をマンはとっているのだから。たとえばトニオが十数年ぶりに故郷の町を訪れた時には、彼は三度も「どこへ彼は行ったか？」という同一文で始まる節を設けて、トニオの心理に潜んでいるものを探り、明示していく。

今のわたしにはそういう小説全体の、またそれを構成する部分の文章は、あまりに技巧的にすぎると見える。この小説の有名な市民と芸術家という観念の設定も、いかにもわざとらしい仕掛けに見える。また、小説の最後に結論として言われる、

「世の中には凡庸性の法悦に対する憧憬を、ほかのいかなる憧憬よりも、さらに甘くさらに味わい甲斐があるように感ずるほど、それほど深刻な、それほど本源的で運命的な芸術生活があるということ。」

という芸術家精神の規定も、傲慢だしい気なものだという気がしない

ではない。

にも拘らず、しかし、十九歳から二十二、三歳頃までのわたしにとって
は、それらこそがまさに最も魅惑にみちたものであったのである。わたしは
今は『トニオ・クレエゲル』をトーマス・マンの若書きの傑作と見做して
いるが、まさにその若書きのところにこそ若者をひきつけてやまぬいい匂
いがあつたのだ。青春には青春向けの傑作がある……。

あの頃『トニオ・クレエゲル』のその魅力にしばれていたのは、わたし一
人ではなかった。ずいぶん大勢の文学青年が、一種の乾いた抒情性のある
この新しい精神と表現の小説にとりつかれていたのをわたしは知ってい
る。

それはよくにとつては、しかし心のある種の行動不能の状態——自分は
認識する者であつて行動するためにはいるのではないというような——に閉
じこめるように作用した。そしてそれがどうにもならぬところまでいった
時、わたしの前に大岡昇平『俘虜記』の颯爽と歩行する文体が現れ、スタ
ンダール『ハルムの僧院』の風通しのいい行動の世界が現れたのだった。
それらがわたしを『トニオ』から解放した。以後わたしは二度とトーマス

・マンに近寄らなかった。スタンダールへの熱狂はずっとつづいて、一時はその作品を読むためにフランス語の勉強を始めたくらいだった。大岡昇平とスタンダールへの忠誠は現在まで変らない。

いったいなぜあの時期、二十代の初め、あんなに『トニオ・クレエゲル』にいかれていたのだろう。そう疑う時思い当るのは、やはり戦争末期から戦後の混乱期にかけてのあの日本の状況である。とくに戦争の終り頃の日本で、芸術とか精神にひかれる若者には、外のいやな現実に対し閉ざされた自分の城を持つために、あの『トニオ』の自分以外の「俗人」と自己を劃然と区別する「精神」「認識」という考え方が実に有効であった。わたしらは『トニオ』の中にもぐりこみ、それと自己を同一化することで自分を守ったのであつたらう。

そういうものとして『トニオ・クレエゲル』はあつたのだった。恥かしいもろもろの思いのまつわるにも拘らず、あえてこれを「青春の一冊」に挙げる所以である。

（『別冊文藝春秋』88年夏号）

この氣迫 学ぶべし

近頃の小説はつまらないとよく言う。わたしもそう思う。何だかどれを見てもダラダラとやたらに長いばかりで、言葉はあるが単に言葉で、軽く、ガチツとした実体がない。読みはするが半年もするとどんな小説だったかさえ思い出せないような、印象不鮮明な作品ばかり横行している。これじゃ誰も小説を見向かなくなるわけだ。

そういう印象不鮮明な現代小説の中においてみると、戦後すぐの頃の小説には、今読返してみても実にくつきりとした個性を際立たせているものが多いことを再発見する。石川淳だつて晩年の長たらしい小説はみなダメで、生きのいいのは戦後すぐ焼跡の中で書いたものだ。「黄金伝説」「焼跡のイエス」、いいですねえ。言葉がビタリと現実を捉えてるよ。書かれた人物も、書く言葉も、書く人間も、みな生き生きしている。

わたしは太宰治のいい読者では決してなかったが、今現代小説の中においてみると、ど的一篇にも太宰の生きている空氣が感じられ、言葉の一つ